

子どもの本だな 49

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

おだんごばん ロシアの昔話

わきた かず え
せた ていじ やく (福音館書店)

おばあさんが焼いたほかほかのおだんごばん。窓辺で冷やされているうちに寂しくなって、ころころころがりだしました。おじいさん、おばあさんの家を飛び出しころころころがっていくと、うさぎやおおかみ、くまに食べられそうになります。「ぼくは、てんかのおだんごばん。おまえなんかにつかまるかい。」おだんごばんはこう歌って逃げ出しました。ところが、きつねは歌を褒め、耳が遠いからもっと近くで歌ってくれと言いました。気を良くしたおだんごばんは、言われた通り鼻の上で歌い、次は舌の上に飛び乗ると、そのままくっくと食べられてしまいました。

長く読み継がれているロシアの昔話絵本。リズムのよい文章と、茶色を基調とした淡い色合いの絵が素朴なお話に合っています。表情豊かなおだんごばんが、歌いながらころころ転がり逃げる様子は愉快です。読んでもらえれば3歳くらいから。

(池之上)

ぼくとくらししたフクロウたち

ファーレイ・モワット 作 稲垣 明子 訳
R・フランケンバーグ 絵 (評論社)

「クフロ」と「メソ」という名のフクロウは、ヒナの時からビリーに育てられたので、自分が人間だと思っていました。どこへ行くにもビリーの後をついて歩き、木の上には爪とくちばしを使ってよじ登ります。ある時、クフロは細い木の枝の先まで行き過ぎて戻れなくなり、助けを求めてホーホー鳴いていました。皆に笑われ、お腹もすいて注意深さをなくしたクフロは、枝から落ちながら翼を広げ、初めて空を飛んだのです。

他にも、クフロが犬のマットに仕掛けるいたずらや、たくさんのペットを飾りたてて「ペット・パレード」に参加するエピソードなど、カナダの大草原を舞台に、ビリーとフクロウたちの毎日がユーモアたっぷりに描かれます。線画の挿絵も、フクロウたちの動きやユーモラスな表情を生き生きと伝えています。10歳くらいから。

(池田)

11月	12月	11・12月の移動図書館 (いずれも木曜日です)				
9日	7日	塚森 地域内 10:30~10:50	沖代 地域内 11:00~11:20	福地(三反長) 地域内 14:30~14:50	米田 公会堂 15:00~15:20	竹広南 公民館 15:30~15:50
16日	14日			原池団地 公民館 15:00~15:20	山田 掲示板前 15:30~15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00~16:30
23日	21日	広坂 公民館 10:30~10:50	上太田 公民館 11:00~11:20		太子 ニュータウン 公民館 15:30~15:50	吉福 公民館 16:00~16:30

お知らせ

「野鳥観察の会」を開催

日本野鳥の会レンジャーの案内で身近な鳥を観察しましょう。

講師：片岡 海里さん

(日本野鳥の会レンジャー)

日時：11月23日(木・祝)

9時30分~11時30分

場所：図書館→斑鳩寺→稗田神社

対象：小学生から大人まで(20名)

申込：図書館窓口または電話で

『 108年の幸せな孤独 キューバ最後の日本人移民、島津三一郎 』

中野 健太著 KADOKAWA 238頁 2017年1月刊 1,700円 (請求記号)334.4

1996年、高校生の著者は初めてキューバを訪れた。当時、キューバは長引く経済危機が原因で生活物資が不足。著者は、困窮した人々の姿に戸惑いを覚え、二度と来ることはないと思った。そんな著者が、ドキュメンタリーに描かれた、人生を謳歌する年老いたミュージシャンたちの姿に衝撃を受け、キューバに魅せられていく。テレビディレクターとなった著者は、キューバを題材に番組を作りたいと渡航した。ある時、99歳の日本人移民が元気に暮らしていると聞き、老人ホームに会いに出かけた。新潟県出身の島津三一郎(みいちろう)さんは、初対面の著者をはちきれんばかりの笑顔で迎え、おしゃべりはとどまることなく、故郷の中学の校歌を誇らしげに歌ってくれた。しかし、第二次世界大戦中の経験を聞こうとすると質問を遮り、さらに、キューバに来てよかったかと尋ねると「やめてください」と断った。著者は、新潟やキューバで関係者を訪ね、歴史に埋もれかけていた日本人移民の足跡をたどっていった。

1907(明治40)年、小作農家に生まれた島津さんは20歳のとき、貧しさから抜け出そうとキューバに渡った。しかし直前まで砂糖景気に沸きかえっていたキューバは、砂糖の価格暴落で経済が悪化、自国民の仕事の確保を優先し、移民排除の風潮が生まれかけていた。島津さんは劣悪な土地でピーマンやキュウリを栽培するが、成功し日本へ帰る目的は一向に立たなかった。真珠湾攻撃から2年後、日本人移民は敵性外国人とされて3年も刑務所に強制収容された。戦後は、高値で取引されるスイカ栽培でようやく生活が好転しかけた頃、キューバ革命が幕を開け、帰国の夢はさらに遠のいていった。

島津さんは、大国のはざまで、自立した国家を模索したキューバの歴史に翻弄されながら、誇り高く生き、一度も帰国できずに108歳となった。著者が届けた新潟の米をいとおしそうになぜか胸が痛む。同時に、経済的には疲弊しながらも国民に医療と教育を無償で提供し、移民に寛容な社会を築き上げたキューバを思うとき、私たちの国のあり方を考えさせられる。

(片木)

11月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

12月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

講演会のお知らせ

講師 小寺啓章さん
 平成30年2月4日(日)
 14時~16時
 会場 あすかホール中ホール

- *カレンダーの×印は休館
- *□は館内整理日。
返却のみ受付(10~17時)
- *開館時間は、
10時から18時まで。
金曜日は20時まで開館。

地下水

野鳥観察会を開くにあたり、九月下旬に、講師の片岡さんに付き合ってもらい、二つの候補コースを歩いた。図書館から斑鳩寺、稗田神社までのコースと、福井大池コース。

頭上高くにトンビが三羽と思つてみると、「ミサゴが一羽いますね。」と片岡さん。図書館を出て早々に、初めて目にするミサゴに興奮するとともに、思い込みで、見逃しているものがたくさんあるのだろうなど、普段の自分に残念な気もした。斑鳩寺で飛んでいた「トンボ」は、片岡さんに「ギンヤンマン」と識別され、ほんの小さな部分の色で識別されることに驚いた。見比べてみるよう、蟬の抜け殻を二つ渡された。一方は出ベソ。それでアブラゼミかクマゼミかを見分けられるとのことだった。バッタを捕まえると凶鑑で名前を確認する。すぐにはわからない大きなカメムシの仲間らしき虫の死骸は、容器に入れ持ち帰る。道中の小さなもの一つ一つに丁寧な観察の目が向けられ、こちらの興味をかき立ててくれる。

図書館周辺で、ヤマガラ、シジュウカラ、エナガが見られるようになった。観察会当日には、なにに出会えるだろう。鳥だけでなく、身近な自然のなかでなにかを発見し、喜びに満ちた時間をまた過ごせると思うと、わくわくする。(竹内)

